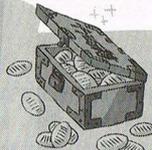


新型コロナウイルス感染拡大に関して、未だ収束の目途が立たない中、世の中全体が暗い雰囲気包まれています。そうした中で「たまには日々の診療を忘れ、明るくなるような記事を読みたい」という要望が届きました。そこで、作家でトレジャーハンターの八重野充弘氏による「夢とロマンの宝探し」の連載を毎月15日号で掲載します。先生方の「夢とロマン」を思い出していただければ幸いです。



# 夢とロマンの宝探し

第1回 徳川の埋蔵金は実在する!

作家、トレジャーハンター 八重野 充弘




金山跡の大規模な坑道

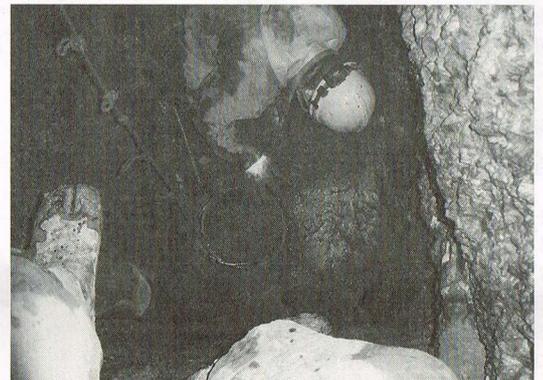
今回からご紹介するのは、日本の地下にまだ眠っているかもしれない宝の話。筆者は人の中には、あの結果を見てつかるはずはなかった。

幕府は当初、400万両の御用金を江戸から赤城山麓に移し、埋蔵するつもりだった。そのための下準備も行った。しかし、赤城は軍事的に不利と判断し、計画を変更。やっとかき集めた数十万両程度を、赤城より北方の地に分散して埋蔵した。

そう考えれば、現在の昭和村、みなかみ町、片品村などに残る、幕末の目撃談の説明がつく。武士団が川舟から重たそうな荷物を陸揚げしていたとか、馬や牛の背に荷物を

徳川の埋蔵金は幻だと断じてしまった人もいるようだ。それは違う。埋蔵計画は確かに実行に移されたようだ。すべてではないにしても、一部はまだ未回収と考えられるのだ。

筆者自身の徳川埋蔵金との関わりも40年以上。そして今、以下のような仮説を立てている。



千両箱が積み重なっていたと思われる縦坑の底を探る

背負わせて運んだなどという伝承が、各地に残っている。これまで、多くの人を惑わしてきたのは、計画段階で漏洩した情報だろう。実際には計画通りには行われていない。

筆者は地元在住の仲間とともに情報を集め、調査を続けてきたが、30年ほど前になる。老人から有力な証言を得た。片品村の山中にある昔の金山跡には、まだ埋蔵された御用金の一部が隠されており、本人が昭和30年代に坑道の奥で16個の千両箱を発見し、うち1個だけは回収したが、同行した仲間が縦坑に落ちて救出できなかったため、残りはそのままだなっているというのだ。

麓の村には、慶応4年3月、牛8頭の背に千両箱を2個ずつ積み重ねて、武士団が山中に分け入っていたという目撃談が残っているし、幕末のころは、金山まで牛が歩けるくらいの道が通じていた。老人はその場所まで案内してくれたが、30年前は坑口がふさがり中に入ることができなかった。筆者は老人の死後もその話を信じて作業を続け、ようやく入り口を見つけて坑道内に入ることができたのは今から10年ほど前のこと。しかし、残念ながらまだ千両箱は見つかっていない。金山跡は思ったより規模が大きく、水没している坑道もある。内部をくまなく調べるにはもう少し時間がかかりそうだ。

〈やえの みつひろ〉



1947年、熊本県生まれ。立教大学社会学部卒。学習研究社、くもん出版でおもに子ども向けの雑誌の編集に携わりながら、1974年に天草四郎の隠し財宝の調査に着手、以後、徳川の埋蔵金など全国各地の伝説を調べ、実際に発掘調査を行った場所も10数カ所に上る。まだ発見したものはない。

著書は『日本の埋蔵金100話』『埋蔵金伝説を歩く〜ぼくはトレジャーハンター』『埋蔵金発見! 解き明かされた黄金伝説』など。趣味は映像制作。